

甌島の二型アクセント—自発談話音声資料の分析¹

Two-pattern Accent Systems in Koshikijima: Prosodic Analysis based on Corpora of Spontaneous Speech

児玉望

KODAMA Nozomi

はじめに

上村孝二(1941)の記述を手がかりとして、鹿児島県本土の西側に位置する甌島(こしきじま)。2004年の合併により全域が薩摩川内市の諸方言の二型アクセントが語声調としてどのような声調配列をもつか、という観点から、鹿児島県立図書館方言ライブラリー収録の自発談話音声資料を分析し、分析例を提示する。併せて、甌島アクセントを九州南部の二型アクセントの系統の中に位置づけるにあたって着目すべき点を述べる。



1 先行研究

上村孝二(1941)は、甌島の3つの島(上甌島・中甌島・下甌島)で1937年に行なわれたアクセント調査の報告である。調査地点は、上甌島の里(旧里村)、中甌、江石、小島、瀬上(以上旧上甌村)、中甌島の平良(旧上甌村)、下甌島の蘭牟田(旧鹿島村)、長浜、青瀬、手打(以上旧下甌村)であるが、このうち、上甌村中甌のアクセントを主流

アクセントとして詳述し、上甌島の瀬上、江石、平良のアクセントを主流外のアクセントとしてまとめ、他の集落の方言については主流アクセントとして言及している。

「主流アクセント」は、「語及び文節において二つのアクセントの山即ち主頂点と副頂点

¹ 本研究は科研費(課題番号2152041100)の助成を受けたものである。

の存する」特徴をもち、「主頂点の位置にのみ就いて考えれば、それが語尾にあるもの、語尾より二番目にあるものの二種類であって、鹿児島アクセントに酷似した」二型アクセントである、とする。

主流外のアクセントはそれぞれ、単音節語に限り型の区別がない（瀬上）²、主頂点と副頂点が逆転する（江石）、副頂点をもたない（平良）という特徴によって主流アクセントとは区別される。

主流アクセントで文節末の「主頂点」と文節頭部の「副頂点」の二つをもつ重起伏となるのは、鹿児島方言のA型に対応する型（以下A型）で4音節以上、B型に対応する型（以下B型）で3音節の文節であり、A型で5音節、B型で4音節以上では「副頂点」は第2音節に固定する。なお、上村(1941)の「音節」は、「準音節」（長音節の自立性の弱い「モーラ」）を含んでいるので、たとえば、イロエンピツは「6音節語」となる。この「準音節」は、B型の末音節の「高」を担うことができるが、A型次末の「高」を担うことができず、この位置が「準音節」となるA型の文節では次次末が「高」となる。

(1) 上村(1941)の甕島主流アクセント³

1音節語	[○]▽	○[▽]
2音節語	[○]○ ○[○]▽	○[○] [○]○[▽]
3音節語	○[○]○ [○]○[○]▽	[○]○[○] ○[○]○[▽]
4音節語	[○]○[○]○ ○[○]○[○]▽	○[○]○[○] ○[○]○○[▽]
5音節語	○[○]○[○]○ ○[○]○○[○]▽	○[○]○○[○] ○[○]○○○[▽]

江石方言については、「主頂点」と「副頂点」の両方をもつ型について、これが主流と逆転することに加え、A型で6音節、B型で5音節以上の文節では文節頭部の「主頂点」が第3音節まで移動することを記述している。

(2) 上村(1941)の江石方言

² ただし、上村(1965)では、短母音が長音化した1音節語の語例にミニマルペアがある。また、アクセントの項では、「語頭の高まりが、人により気分により語尾のそれより高められることもある」という、江石方言と似た特徴が報告されている。

³ 表記は改めた。○は名詞の各音節、▽は助詞を表記する。ピッチ変化については、[: 音節間上昇,] : 音節間下降、[[: 後続音節上昇調,]]: 先行音節下降調の記号を用いる。「副頂点」は斜体で表記する。本稿は、このような「位置の指定」は語声調の音韻表記にとって本質的ではない、という立場であり、語例のピッチ形の聴覚的な近似として補助的に用いる。

3 音節語	○[○]○ [○]○[○]▽	[○]○[○] ○[○]○[○]▽
4 音節語	[○]○[○]○ ○[○]○[○]▽	○[○]○[○] ○○[○]○[○]▽
5 音節語	○[○]○[○]○	○○[○]○[○]
6 音節語	○○[○]○[○]○	○○[○]○○[○]

(3) 上村(1941)の平良方言

3 音節語	○[○]○ ○○[○]▽	○○[○] ○○○[○]▽
4 音節語	○○[○]○ ○○○[○]▽	

cf. ハマ[ダイ]「蛤」、アン[サン]「兄」

上野善道(1984)は、村上方言の非弁別的な第2音節の高まりを「句音調」とする分析を中心として、川上葵氏の「句」の概念が方言アクセントの研究においても有効であることに注意を喚起した研究である。この中で、村上方言と同様な「非弁別的な第2音節の高まり」として上村(1941)の甕島主流方言の「副頂点」が紹介されている。さらに、通時的な解釈として、鹿児島方言に近い平良方言から、甕島主流とさらに江石方言へ変化していく中間の段階として、以下のような型を仮定している。

(4) 仮構形1=上野(1984:p25) (26)

A	[○]○ ○[○]○ [○]○[○]○ [○]○○[○]○ [○]○○○[○]○
B	○[○] [○]○[○] [○]○○[○] [○]○○○[○] [○]○○○○[○]

(5) 仮構形2=上野(1984:p26) (30)

A	[○]○ ○[○]○ [○]○[○]○ [○○]○[○]○ [○○]○○[○]○
B	○[○] [○]○[○] [○○]○[○] [○○]○○[○] [○○]○○○[○]

2 自発談話音声資料の分析～上甕村中甕方言を中心に～

鹿児島県立図書館方言ライブラリには、甕島方言の談話音声資料が5本収録されている。里村方言(43-1)、上甕村方言(44-1, 44-2)、下甕村方言(45-1)、鹿島村方言(46-1)である。上甕村のものは、44-1の対訳の表題に「上甕島のことば—中甕・浜のことば」と付されており、また、2本の談話の参加者に重複があることから、いずれも上村(1941)の「主流アクセント」と同一の方言と考えることができる。他の3本もいずれも主流アクセントと分類されている方言であるが、文節頭の「副頂点」の位置が、下甕村方言が(4)の仮構形1、里村方言が(5)の仮構形2に近い形でほぼ一貫している、というように、村ごとの違いには容易に観察

できるものもある。

従って、上村(1941)の甑島主流アクセントのデータは、上甑村中甑（自称なんごし、他称なかごしき）の記述であると考えべきである。この方言は、上村氏自身の母方言であり、内省に基づくデータを現地調査によって再確認した信頼性の高い記述だと考えることができる。にもかかわらず、上甑村方言の談話資料の音声と上村(1941)の記述との間には少なからず隔たりがある。たとえば、「副頂点」を除けば「鹿児島方言と酷似」したデータを期待して聞くと当惑するほどに、実際の音声の印象は鹿児島方言と異なっている。ただし、文節ごとに型の弁別があることはわかり、「重起伏をもつ二型アクセント」という音韻解釈は首肯できる。おそらく問題は、音節（あるいはモーラ）を単位としてそのそれぞれに「高」「中」「低」の段階声調を配置する、という音声の記法が、「語声調」としての甑島方言（および鹿児島方言）にそぐわないのである。この点を、談話音声資料の分析に基づいて論じ、最後にこれらの談話資料のデータから新たに明らかになったアクセント史研究上の問題点をまとめる。

2.1. 「主頂点」と「副頂点」

上村(1941)によれば、甑島主流アクセントとは、ある程度長い文節で、文節頭部に「副頂点」が、文節末部に「主頂点」が現われる体系をいう。主頂点と副頂点の関係は「高低関係」であり、江石方言ではこれが逆転する、という記述になっている。上野(1984)や Haraguchi(1977)でも、この点を踏まえて、「副頂点」に「中」やMを配している。しかし、談話資料では、ピッチ高自体は、ほとんどの場合に「副頂点」側が高い。これは、上甑村方言に限らず、4方言すべてのテープで同様であり、「副頂点」の違いに基づく方言間の違

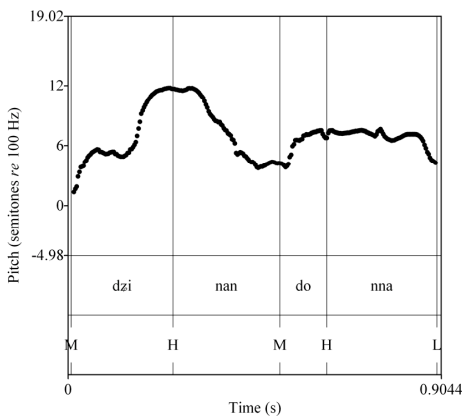


図1 [ジ]ナン[ドン]ナ 「次男さんは(A)」 44-1 6'53''

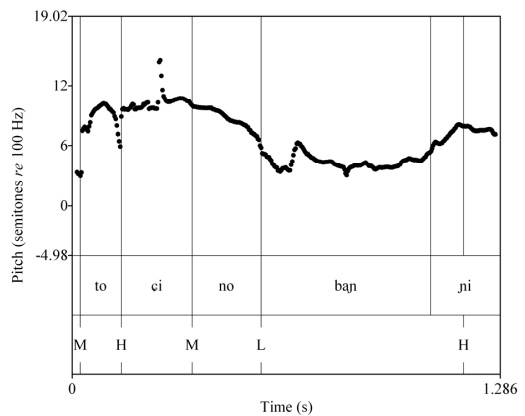


図2 ト[シ]ノバン[ニ 「年の晩に(B)」 44-1 0'52''

いが比較的容易に聞き分けられるのは、(非母語話者にとって) もっとも知覚しやすい特徴が副頂点であるからである。「主頂点が非常に高くなったり、副頂点がさ程卓立しなかったりする」例も実際に現れるが、前者の場合でも通常は副頂点まではピッチが回復せず、後者では、主頂点側も卓立しないため全体として平板に聞こえるけれどもピッチ分析をするると二つのピークをもつ曲線が確認できる、という場合が多い。中甌音声資料の中で「副頂点」より「主頂点」が高くなっていることが確認できた唯一の例は、完全反復の発話([オ]ト[ロツ]カ]オト[ロツ]カ 「恐ろしい(A)恐ろしい」)での二回目の実現形である。主頂点側のピッチは安定した反復であるが、副頂点側が高低に著しく変化する。

「高低関係」がピッチ高の間のそれでないとするれば、主頂点側で際立っているのは何であろうか。1つの可能性としては、各頂点へのピッチ上昇の幅が考えられる。特にB型の場合は、主頂点・副頂点がともに、先行音節があればその音節からのピッチ上昇を伴っていることから、この上昇の大きさの違いとみなせそうにも思われる。「副頂点」が第2音節にある場合、第1音節もかなり高いため、この上昇幅は小さい。これに対して、「主頂点」が文節末の短い音節にあるときは、必ず次末音節が低められる。長い文節では、「副頂点」から下降した後にある程度ピッチが持続し、次末音節直前で大きな段差を作ってピッチが下降しているのが聞き取れる場合が多い。

しかし、A型の場合には、B型の場合のような主頂点に先行した音節の低めは、副頂点との間が1音節以下であるような音節構造の文節を除く、長い文節では聞き取れない。先行音節からの上昇の大きさは、上村(1941)の記述にあるような可変的な特徴のひとつとなっていると考えられる。むしろ、可能性としては次末音節から末音節への下降の幅が関与していると考えたいのであるが、この点についても、音声資料のデータでは、音節構造による違いや方言による差が大きい。方言によっては、B型との弁別は「上昇しない」ことによるのではないと思われるほど下降幅の小さい発話もある。さらに、方言によっては、次文節がかなり高く始まっているものもあり、文節末の境界声調を立ててその上昇幅(あるいは下降幅)の大きさから「末音節の際立ち」を推論することも考慮しなければならない。

以上のような観察から、「主流アクセント」における「主頂点」の際立ちは、何らかの特定の音声的特徴の実現と考えるよりは、型の弁別が文節末位置の(最大)2音節で実現している、というような、より抽象的な(音韻論的な)性質のものとして理解すべきであるように思われる。「副頂点」は、上野(1984)の指摘の通り、型の弁別には関与しておらず、現われるかどうかと現われる場合のその位置は、「主頂点」に応じて決定される。文節の音

節構造によって、たとえば上村(1941)の4音節語（つまり4モーラ文節）のA型で次々末モーラに「主頂点」がある場合には、「副頂点」は現われない。

2.2. 「モーラ方言」として分析できるのか

上村(1941)の中甌方言の記述は、音節構造の違いごとの実現形の記述が充実している。鹿児島方言（及び重起伏のない平良方言）との対比で、特に、準音節（独立性の乏しい音節）がB型では単独で「主頂点」を担うことができ、A型では「主頂点」の次々末モーラへの移動を引き起こすことについては2章でまとめた通りであるが、語例の中にはさらに、副頂点の「高」を準音節が担う例も数多くあげられている。これは、A型とB型でのこれらの音節の振る舞いの違いが、単純な音声的な条件で（たとえば「低」が後続する位置で準音節が「高」になれない、というように）説明できないことを示しているように思われる。

「準音節」のみが「高」、ということは、これを含む長い音節全体が上昇調になっている、ということであるが、「音節」を基礎として中甌方言の型の実現を書き換えてみると、以下のようなになる。

(7) a. 末音節が長音節

A型： 末音節下降調 HL

B型： 末音節上昇調 LH

b. 末音節・次々末音節が短音節

A型： 次々末音節 H 末音節 L

B型： 次々末音節 L 末音節 H

c. 末音節が短音節、次々末音節が長音節

A型： 次々末音節下降調 HL 末音節 L

B型： 次々末音節 L～次々末音節下降調 HL 末音節 H

(7)cのB型で次々末音節に下降調が現われるのは、この位置に「副頂点」が現われる場合、つまり、全体が3モーラあるいは4モーラの場合に限られる。前節で述べた、音声資料の長いB型文節での次々末音節の低めは、この音節全体が低く聞こえ、下降調にはならない場合が多い。この点を考慮すると、A型ではHL、B型ではLHという声調配列が、文節末音節が長い場合にはこの音節の曲調として、短い場合には次々末音節と末音節の2音節にわたって実現している、というだけであり、すべての長音節が2「モーラ」に分かれてHやLが配置されているわけではない、という解釈も可能であろう。

(7)cのB型で、「準音節」が（無声の）促音である場合と、長音や撥音・二重母音の後部要素など有声の場合の振る舞いの違いについて、上村(1941)には興味深い言及がある。

(8) [ケー][ダ] 「漕いだ」 タッ[タ] 「立った」

3モーラ文節については、「語頭にあるべき副頂点は明瞭に聴取ることが出来ない」と明記されている。(7)bの場合と同様に、2音節でLHを実現することが優先され、副頂点が置けない例、とも解釈できる。この種の文節は音声資料でも確認できるが、談話中で文節末音節が伸ばされて副頂点が現われる語形と両方が聞かれるものも多い。

(9) ヤッ[デ] ~ [ヤッ][[デー] 「だから」

4モーラ文節のB型では、無声であるはずの促音を挟んで「副頂点」と「主頂点」が共に表記された(10)のような語例が現われる。

(10) ア[ユ]ー[ダ] 「歩んだ」 ア[マ]ッ[タ] 「余った」

これがどのような発音を表記しているかの説明はないが、音声資料中に現われる[ヨ]カッ[タ] 「よかった」、[カ]カッ[タ] 「かかった」のような語形から、冒頭音節からの上昇が2音節目の冒頭に残るような、上昇下降調の閉音節を「高」と表記しているのではないかと推測される。

一方、「準音節」が「副頂点」に現われている場合、文節頭の長音節が上昇調になっていると考えることができる。この語例は上村(1941)に多い。しかし、

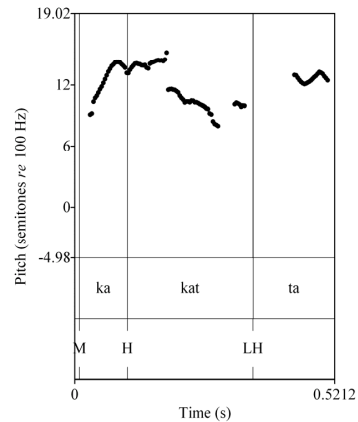


図3 [カ]カッ[タ] 「かかった(B)」 44-1 4'23''

「副頂点」に続く位置での「準音節」は、B型主頂点に先行する次末長音節 ((7)c:B型)を除くと、語例が1例もない。つまり、A型の主頂点に先行する位置の長音節が下降調になっている語例がないのである。音声資料で確認すると、下降調の実現にはイントネーションが関与するらしいことがわかる。

(11) [[サン][ガ]ツノ 「三月の」 [[ナイ][ロン]] 「ナイロン」 [[シン][オ]ジ 「しん小父」 [[ベン][ト]ー]]バ 「弁当を」

(12) [[キン][カン]]ノ 「金柑の」 [[バー][サン]]ガ 「婆さんが」 [[ムイ][カ]ノ 「六日の」 [[ベン][ト]ー]] 「弁当」 [[シー][モン]]ニ 「吸い物に」 [[イー][ヨ]ッ[タ] 「言っていた」 [[スイ][ジ]オ 「炊事を」 [[ソイ][カラ] 「それから」

(13) [セー][[ボー]] 「せーぼー」 [タイ][[タイ]]~[テー][[タイ]] 「炊いたり」 [ベン][[ト]ー]] 「弁当」 [ジー][[サン]]ト 「爺さんと」 [ソイ][[カ]ラ] 「それから」

(11)は主頂点のみが卓立する実現形、(12)は副頂点のみが卓立する実現形とみなすことが

できる。(13)は、主頂点と副頂点の両方が卓立している語例で、最初の例は「せーぼー」という方言語彙を説明する文脈に現われる、おそらくは丁寧な発音である。文節頭長音節が下降調で現われるのはこのようなはっきりした発音に限る。

文節頭音節が促音に終わる長音節のときは、短音節と似た分布になり、この音節が上昇調をとり副頂点をもつのは、B型文節末のLHの直前(14)と、A型文節末のHLの前に2音節がありその1音節目となる場合(15)に限られる。

(14) [[イッ]ピ[キ]「一匹」 [[ガッ]テン[ノ]「合点の」 [[ケッ]コン[ガ]「結婚が」

(15) [[イッ]サ[キ]ガ「いさきが」 [[イッ]シュー(())カン]]デ「一週間で」

有声の長音節で確認される(10)や(12)のような、A型HLの直前の副頂点は、促音に終わる長音節の音声資料では確認できず、また、B型文節末のLHに先行して2音節がある場合の副頂点は、2音節目の長さに関わらず副頂点はこの音節に現われる。

(16) ガッ[コー]]ノ ～ガッ[コーン]]「学校の」

(17) オッ[カ][[サン]「おっかさん」 イッ[チョー]ラ[ノ]「一張羅の」

上村(1941)では、小島集落の方言について、「シチの母音無声化によって主副両頂点が後退」する現象についての記述があるが、同様の、必ずしも無声子音に先行しない位置での狭母音の無声化は上甌村音声資料にも現われており、この場合、副頂点が「前進」し、頭音節が促音に終わる長音節である場合と似た分布になる。

(18) ドシ[コ]デ[モ]「いくらでも」 コシ[キ]ジマ]ジュー[ニ「甌島じゅうに」

イチ[バン]ドイ[ノ]「一番鶏の」 ウシ[ロ]パチ]マ[キ「後ろ鉢巻」

(15)、(17)、(18)の例からわかるように、副頂点の位置の決定にはモーラではなく音節を考慮しなければならない場合がある。これは、冒頭音節が短い音節であるときにも同様にあてはまる。モーラで統一して分析することもできないわけではないが、「準音節」との関係での頂点の移動規則は、上村(1941)で挙げられているものよりもはるかに複雑になると考えられる。むしろ、甌島方言のアクセントの「語声調」としての性質を考慮し、それぞれの型には一定の声調配列のみが指定されており、この声調配列が文節の音節構造に応じて各音節に配分される、という分析のほうが直観的であると考えられる。この、型固有の声調配列を、重起伏音調(Hを2箇所もつもの)と「主頂点」のみの音調に分け、(19)のように仮定する。

(19) A型 (M)HM+MHL～(M)HM+!HL, (M)HL B型 (M)HM+LH, LH

「主頂点」と「副頂点」を共にHとし、「低」の側をMとLの二段に分け、Hへの上昇、Hからの下降は「主頂点」側が卓越すると考えて「主頂点」側にL、「副頂点」側にM(中)

を配置する。(12)のような「主頂点」が卓立しない場合は、主頂点への上昇が抑制され、下降のみが実現すると考え、!H で表す。M+は、0 個以上の平進音節で、文節の音節数に従って長さが可変な部分を表す。A 型では、重起伏になるためには最低 1 個の M が二つの H の間に必要である。LH, MH は上昇、HL, HM, ML は下降であり、これが音節内部の上昇調・下降調で実現するか、2 音節間での上昇・下降として実現するかは、文節の音節構造で決定され则认为。まず、「主頂点」周辺の A 型 HL、B 型 LH の文節末部の音節への配分が、(7)によって、つまり、末音節の種類によって決定される。(7)c には、以下のような「副頂点」実現に関する条件を加える。

(7) c'. 末音節が短音節、次末音節が長音節

B 型： 次末音節 L 末音節 H

次末音節の先行音節がないか短音節 1 個であれば次末音節 HL

これ以外の、副頂点の有無及びある場合のその音節配分は、文節頭音節の種類と、HL・LH に先行する部分の音節数によって決定される。

(20) a. 頭音節が有声の長音節

A 型： 頭音節上昇調 MH 文節末 HL との間に後続音節があれば M+

文節末 HL の直前で上昇調 MH または下降調 HM

B 型： 頭音節上昇調 MH 文節末 LH との間に後続音節があれば M+

b. 頭音節が短音節、あるいは促音/無声拍に終わる長音節

A 型： 文節末 HL との間に 2 音節以上あれば HM+M、頭音節 M

文節末 HL との間に 1 音節のみなら M、頭音節(M)H

文節末 HL の直前で頭音節 M

B 型： LH との間に 1 音節以上あれば HM+、頭音節 M

LH の直前で頭音節 MH

HLH の直前で頭音節 M

語声調の型の音韻表記としてより本質的なのは、(19)の声調配列であり、(20)の音節配分は、絶対的なものではなく、おそらく多少の揺れはありと予想される。たとえば、上村(1941)のア[マツ][タ]の表記は、MHLH が(20)b が想定する MH-L-H より、M-HL-H に近いという母語話者の意識を反映するものであるかもしれない。(21)の揺れは、ロイが音節を成すかどうかの音節構造の違いを反映するという解釈もできるだろうが、単に、同じ MHLH の最初の H の実現位置の微妙な揺れである可能性もある。

(21) [イ]ロイ[ロ ~イ[ロ]イ[ロ 「いろいろ」

2.3. 「句」とアクセントの弱化

上野(1984:p27)では、「甌島方言の非弁別の特徴が句音調として分離できるものかどうかは、すべて今後の調査研究に俟たなければならない」としている。もしも「副頂点」が句音調として分離できるならば、「間に切れ目なく発音された一続きの」連文節構造では、これが現れるのは句頭の文節だけであり、句の2番目以降の文節は「鹿児島方言と酷似」した音形となるはずである。しかし、この予想は談話音声資料からはまったく裏付けられない。

鹿児島方言の「文節」の中には、付属語がアクセント単位として独立するものがあるが、この場合でも、付属語が否定語を含む場合のように特に強調される場合を除いて、文節全体は「句」になっていることが多い。鹿児島方言ではこの場合、付属語は上昇が抑制されて語声調による下降だけが実現するため、句は全体としては句末に向かってピッチが下降していく音形になる。これに対して、甌島の諸方言の連文節では、独立する付属語の部分にも重起伏が現れるばかりか、鹿児島方言に対応する形で「句」があるとすれば、それは句末に向かってピッチが上昇しているのではないかという印象を与えるような音形がしばしば聞かれるのである。(22)と(23)はいずれも中甌方言の談話音声の例である。

(22) [アグッ]チェー][トイ][ト]コ[イー] 「開い(A)ている(A)ところに(A)」

(23) [ト]レタ[[モン[ヤッ][[デー 「とれた(B)もの(B)だから(B)」

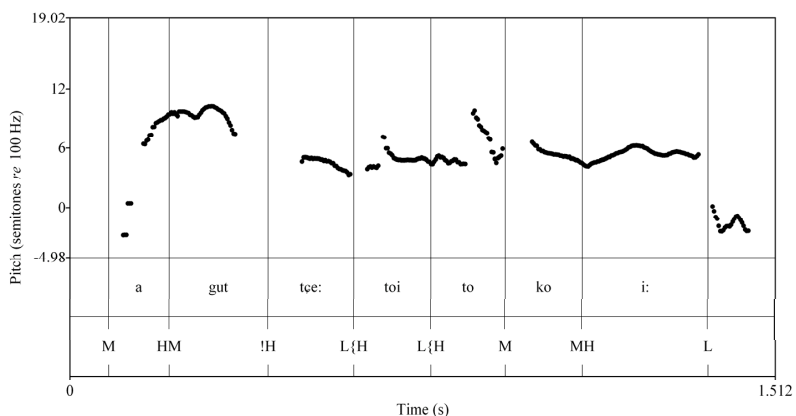


図4 [アグッ]チェー][トイ][ト]コ[イー]「開い(A)ている(A)ところに(A)」44-1 20'07''

ただし、境界付近のピッチ形を観察すると、同じ上昇であっても先行文節の型によりいくぶん違いがある。先行文節がB型の場合は、この型の末尾の上昇した終点が、そのまま

次の文節の「副頂点」の高さとなっている場合が多い。副頂点をもたない A 型(HL, MHL) の場合は、この高さから平進して下降する。これに対して、副頂点をもたない B 型の短い

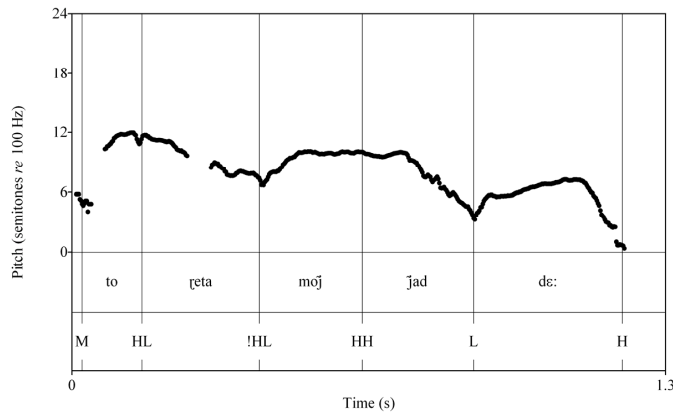


図5 「ト」レタ[[モン「ヤッ」[[デー「とれた(B)もの(B)だから(B)」44-1 20'21''

文節 (LH)が後続する場合、本来の L の冒頭まで H が続いて下降するため、次文節の H に向かって下降する印象を与える音形になる場合がある。鹿児島方言との大きな違いは、鹿児島方言では B 型文節末に境界声調として音節間下降があり、次の文節が H ではじまっても L ではじまっても必ず B 型文節末より低くなるのに対し、中甌方言の B 型では、このような境界声調を欠いている、という点である。

これに対して、先行文節が A 型の場合は、型の声調としては文節末に上昇の要素をもたないにも関わらず、後続する文節がある場合にこの文節が先行文節末より高くはじまっている。つまり、A 型の文節末に上昇調の境界声調（図 4 では”{“で表記する）を仮定しなければならない。A 型文節末にこの種の上昇調境界声調のある方言は、いわゆる「しみじみ調」のような特殊なイントネーションを除けば⁴、鹿児島県本土側には見当たらないように思われる。この、上昇調の境界声調は、A 型の文節末に必ず観察されるわけではないし、方言によってはまったく出現しない資料もあるので、甌島でも何らかのイントネーションが関与している可能性はあるが、「しみじみ調」ではなさそうである。

このような文節境界の特徴が、句の内部での文節境界にのみあてはまり、「句」の境界とは区別されるか、言い換えれば、甌島方言に文節以外に「句」を定義できるかどうかは、

⁴ 鹿児島方言のしみじみ調について、児玉(2008)では、単に句末の H 以外の H が抑制されると説明したが、A 型の文節末には上昇調の境界声調(次文節の文節頭が H でも L でも前文節末の L より高い)が必要である。これに対し、B 型の文節末 H より高くなければならないのは次の H のみであり、通常の B 型文節末の下降調境界声調が保たれる。

議論の余地があると思われる。上野(1984)の「句音調」は、「句」に固有の音声的特徴であって、文節単独の発話では必ず実現するが連文節発話では実現しないことがありうるような、アクセントの弁別には関与しない特徴をいう。郡史郎氏の「アクセントの弱化」も、連文節発話において「句音調」を欠いている場合を、文節単独のアクセントの実現と比べて「弱化」している、とみなす用語法であろう。甌島方言の場合、以上で述べた連文節発話は、A型の境界声調、つまり、連文節発話のみで実現するようなピッチ変化が存在している、というだけであり、文節単独の発話と連文節発話の双方で「重起伏」が現われており、多くの方言で「アクセントの弱化」に結び付けられるピッチ下降も観察されないという点では、文節単独のアクセント実現と連文節でのアクセント実現の区別としてそれほど目立つ特徴はないようにも思われる。

しかし、厳密に言えば、中甌方言でも、連文節の後続文節のアクセント実現独自のピッチ上の特徴がないわけではない。たとえば、(19)で定義した中甌方言の語声調は、多くの場合に冒頭にMHの上昇をもっているが、この上昇は連文節の後続文節には現われない。単独の発話であってもこの上昇幅は大きくなく、また、多くの場合は型の弁別に関わらない「副頂点」の実現にのみ関わっているという点でも、非常に微妙な違いであるとはいえ、鹿児島方言など多くの二型アクセント方言の連文節後続文節において、(ピッチ下降に加えて、)語声調内の冒頭からの上昇部分が抑制されると平行的な現象ではある。もうひとつは、文節単独では重起伏をもたないような短いB型文節(LH)が、B型文節に後続する場合にのみ、冒頭部に先行文節末のピッチを持続するようなHが加わった実現形をもつ点である。このようなB型文節が連続する連文節では、全体が平板な印象を与えるピッチの推移となる。

(25) ニ[[セントツテキタ]ドー

「二銭取って来たぞ(と)」

この種の先行文節のHが次文節に引き継がれるような実現形は、文節末に下降調の境界声調を持たない二型アクセント体系(薩摩半島南部B型、屋久島B型の短い文節)でも共通に観察され、「句」の内部の文節境界においてのみ起きる声調同化であるとみなしてよいと思われる。

いずれにせよ、観察される実現形の変異は微妙であるので、連文節が一句であるか二句であるかが区別されるかどうか、されるとしたら(ピッチ以外の分節音の実現変異を含め)どのような音声的实现によっているかを、連文節のリスト調査によって詳細に記述する必要はあるだろう。

2.4. 甌島方言の史的位置付け

上村(1941)で、甌島主流アクセントが平良方言のように甌島にも確認される「鹿児島アクセントに酷似」した体系に(非弁別的な)「副頂点」が加わるような変化が起きて生じた体系とみなしうるようにみえるのは、「高」の位置に基づいた「位置のアクセント」としての記法に拠るところが大きい。しかし、「低」や曲調の現われにも着目して、鹿児島方言とどこが似ていてどこが異なるのかを整理しておくほうがよいと思われる。鹿児島アクセントと甌島主流アクセントの共通点は、(26)dを除けば、抽象化された特徴での類似にとどまるように思われる。

(26) a. 文節を単位とする二型アクセントである。

b. 文節末の固定した声調配列が型の弁別に関与する。

c. 文節頭の声調配列は型の弁別に関与しない。

d. A型の文節末の声調配列はHLである。

(26)a-cは、鹿児島アクセントだけでなく、鹿児島県本土のほとんどの二型アクセントに共通の特徴である。これに対して、違いは少なくとも以下のようなものがある。

(27) a. 文節頭に固定した声調配列をもつ。(鹿児島では可変長部L+のみ)

b. B型の文節末の声調配列はLHである。(鹿児島ではH)}

c. 長音節で(可変長部以外の)固定声調配列が曲調として実現する。(鹿児島アクセントのHは、長音節でも高平調で実現しうるような、「長さをもつ」Hである。)

d. A型文節末に上昇境界声調{を持つ。(鹿児島にはない。)

e. B型文節末に下降境界声調{を持たない。(鹿児島にはある。)

(27)aは「重起伏」である。鹿児島県本土では薩摩半島南西部のアクセント体系にしばしばみられる。(27)cは、いわゆるモーラ方言(vs.シラビーム方言)の言い換えであり、薩摩半島の北部と南部に分布するが、(27)bの実現としての上昇調が有意味な方言は薩摩半島南部に限られる。(27)dは、鹿児島県本土にはおそらく分布しない。(27)eは薩摩半島南西部に分布している特徴である。全体として薩摩半島南西部と共通の特徴が目立つが、問題は、これらが、甌島と薩摩半島南西部に共通の革新形であるのか、残存形であるのか、あるいは、何らかの類型的特徴に基づく平行的な革新形なのか、ということである。ここで重要なのは、同じ甌島にあって上村(1941)で「鹿児島アクセントと殆ど一致する」体系として報告されている平良アクセントである。データからは、(27)a-cの特徴の点で甌島主流アクセントと異なるのではないかと推測されるが、(27)d-eを含め、より詳細な情報を得るための自発談話資料は残念ながらない。しかし、甌島内部でのアクセント変化を探る上で、

他の「甌島主流アクセント」も重要な手がかりとなると考えられるので、上甌村以外の談話音声についても、中甌方言と同様な分析を行なう。

3 甌島諸方言の音声資料の分析

3.1. 里村方言(43-1)

中甌と同じ上甌島の北東部にあった村で、その中心部の3つの集落の話者の談話である。45分のテープA前半は場面設定による会話を、おそらく読み上げによって演じている部分が主体で、イントネーションに関しては信頼性が低いデータである。後半はいくつかの自由会話が収録されている。テープB面は、共通語対訳となっている。副頂点の実現形は中甌と異なり、最大2音節の高平調であるが、分析してみると、(19)に比較的良好に対応した(28)のような語声調が抽出できる。文節頭短音節や長音節冒頭に鋭い上昇が現れることもあるが、これを欠く場合もあり、それに続くHの持続のみが有意味と考える。

(28) A型 (H)HM+MHL{~(H)HM+!HL{, (H)HL

B型 (H)HM+LH~(H)HM+L!H{, LH~L!H{

「主頂点」に関しては、B型でもしばしば語末の上昇を欠き文節頭の「副頂点」だけが際立つ実現形が現われているのが特色である。この場合でも、後続の文節は高くはじまっております、これを上昇調の境界声調”{”で表記した。A型でも、「主頂点」の有無による対立が観察される。

(29) [カ]ナ[ラ]ズ~[カナ(I)]ラズ 「必ず」 [ポー(I)][ウ]チ~[ポー(I)]ウチ 「棒打ち」

「主頂点」の前のMは、「主頂点」の卓立のある場合にのみ実現する。末音節が長音節であれば、HL、!HLが下降調、LHが上昇調、L!Hが低平調となる。!HLとL!Hの対立は、先行M+からの音節間の下降の有無によっても維持されているが、文節が短く直前に副頂点のHがある場合、B型のH]L!HだけでなくA型のHと!Hの間にも通常は音節間下降が現れるため、型の判断に迷う音形もある。

副頂点側では、中甌のMHにほぼ対応する形で2音節以内の高平調が現われるが、冒頭音節が長音節であっても高いピッチが2音節目まで持続する語例も出る。

(30) [ゼンコー]]セー(I)トガ「全校生徒が」 [ガキタイ]]ショー[デ 「餓鬼大将で」

連文節構造で、(ヤイモス「です(B)」など独立する付属語や補助動詞・形式名詞を含む)後続文節が高くはじまり、またしばしば重起伏付きで実現するデータは、先行文節の型に関わらず頻出する。後続文節の「副頂点」が2音節のHをもつ場合、先行のHがより高く実現するのも、「アクセントの弱化」である可能性がある。2音節のB型文節(例: トーキ

「時」は、全体が高平調の実現になっている。しかし、数は少ないが、文節冒頭での上昇を欠く発話もある。

(31) [タノ]シ[ミ]ヤツタト]=ナー 「楽しみ(B)だった(B)ん(A)だなあ」

(32) [モロー]テ]]コー 「貰って(A)こよう(B)」

3.2. 下甕村方言(45-1)

北端部を除く下甕島の多数の集落を含む行政区であるが、会話の内容から南部の手打集落周辺の話者の談話であると推定される。A面45分、B面30分の録音である。中甕から距離的には遠いが、A型HL、B型LHの「主頂点」の実現については、中甕との間に目立った違いはない。

「副頂点」が文節頭音節で実現することが特徴的なアクセントであるが、ただし、この頭音節は、短い音節でも上昇調であり、この場合、下降の開始する次音節までが後続の音節よりかなり高く聞こえる。頭音節が促音を含む長音節では、頭音節の高ピッチ部分が無声になるため、繰り返される発話ごとに頭音節と次音節のどちらが高いか判断が難しい発話もある。

(33) [[イツ]シュー]]カン]]~イツ[シュー]]カン]](MHM!HL) 「一週間」

[[イツ]シュー[カン]](MHMHL) 「一週間」

また、頭音節の母音が無声化している場合に次音節が短ければH、長い場合と次音節がB型LHのLに相当する場合にHLの下降調で実現することも、おそらく冒頭部の音節配列が音節の長さに関わらず上昇調で実現する配列(MH)であることを示唆していると考えられる。冒頭音節が長い場合には、高平調に聞こえる非下降の声調となるが、ピッチ形では上昇

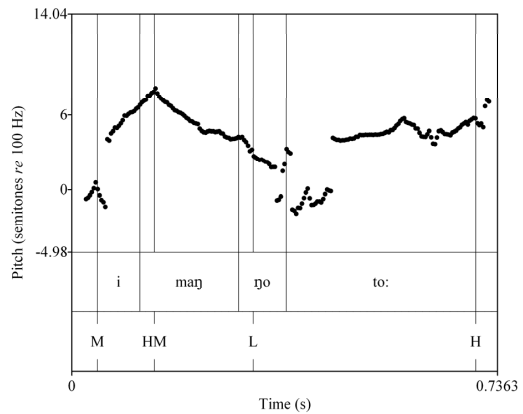


図6 [[イ]マン]ゴト 「今みたいに(B)」 45-1 2'26''

(34) A型 MHM+HL~MHM+!HL, HL

B型 MHM+LH, LH

副頂点は1音節で完結しており、音節配分については中甕の(20)のような複雑な場合分

けはなく、また、A型のHLに先行してMを立てる必要はない。HLの直前が短い音節1つの場合でも、冒頭の短い音節に上昇調が現われる。A型のHL、B型のLHより前に1音節以上の音節があれば、頭音節の長さに関わらずMHM+が配分されると考えられ、「主頂点」の卓立の程度に応じた揺れが現われる。HLに先行する音節が長い場合にも、(13)のような下降調の現われている例は見当たらない。

(35) [[ウ]エン]~[[ウ]エン] 「上の」

連文節構造では、中甑や里のような上昇調の境界声調は観察されない。先行文節がB型の場合は、その高さで副頂点の「高」からの重起伏が実現するため、「アクセントの弱化」が期待される位置でも後続文節のピッチは高いが、A型に後続する場合は文節全体のピッチが低くなる。

(36) [[ブツ]カッ]タト]キ[ワ 「ぶつかった(A)時は(B)」

B型文節に短いB型文節LHが後続する場合のLの上昇は聞かれない。(37)のように先行する下降調の境界声調が現われてピッチが下降すると疑われる例は稀であるが、「主頂点」の上昇が小さいため全体として平板に聞こえることにより、先行文節より少しずつピッチが低下していく。

(37) ン[マ]ヤッ]ド 「馬(B)だ(B)ぞ」

(38) [[ハン]タイ[ニナッ](I)テ 「反対に(B)なって(B)」

(39) ~チュー~]]コト(I)ニナッ(I)テ 「~という(A)ことに(B)なって(B)」

3.3. 鹿島村方言(46-1)

下甑村北端部の大字藺牟田が1949年に下甑村から分立してできた行政区が鹿島村である。藺牟田瀬戸を隔てて中甑島に面する。3名の話者による談話が45分収録されている。

「主頂点」が卓立しない発話が非常に多い点が特徴的である。A型HL、B型LHの主頂点が卓立している発話も現われるが、副頂点のあるような長い文節では、何らかのイントネーションによる有標な発話ではないかと疑われる場合が多い。この場合を除いた声調配列は(40)のように分析できる。

(40) A型 (M)HM+M!HL, (M)HL B型 (M)HM+L!H{~(M)H+L!H}, L!H{

「主頂点」が卓立しない長い文節では、型の弁別は文節末の「低」の長さと同曲線(A型下降調、B型低平調)、後続文節がある場合には、境界声調“{”による後続文節のピッチ上昇の有無によって実現していると分析できる。「副頂点」は、里村に似て最大2音節の文節頭の終端部が高平調となる。ただし、文節頭の上昇はHに先行するMが区別できる程度

には長い。「副頂点」冒頭の(M)H が 1 音節となる場合は、中甌方言の(20)に似た場合分けが想定される。

- (41) [チ]マン[キッ]テ 「つまみ切って(A)」
 [エン]ソクニ]モ 「遠足にも(A)」
 [バス]ケット]バ 「バスケットを(A)」

ただし、副頂点 H の高平調と後続の M+の間のピッチ下降が聞き取れない場合が、特に B 型文節の発話を中心に頻出する。

- (42) オ[ナ]ゴドモ]ワ オ[ナ]ゴ[ドー]シ 「女どもは(A)女同士(A)」
 オ[トコ]ド]モワ オ[トコ]ドーシ 「男どもは(B)男同士(B)」

「主頂点」が卓立しないことも併せ、全体として平進音節が卓越しているピッチ推移であり、平進音節と音節間下降の段差が際立つ「シラビーム方言」的な印象の発話である。L や M+に先行する位置の長い音節でも、下降調はほとんど現われない。下降調が現われるのは、2 音節の B 型文節のうち頭音節のみが長い場合のこの頭音節と、A 型文節末の「主頂点」に限られる。この A 型文節末の下降調は、必ずしも長音節に限るわけではなく、短い音節であっ

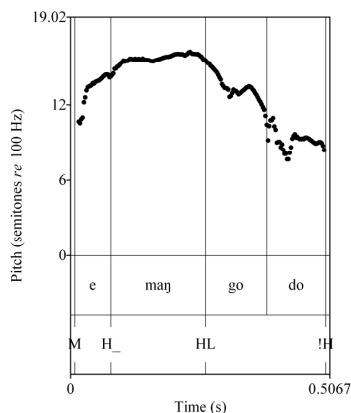


図7 エ[マン]ゴド「今みたいに(B)」 46-1 17'26"

ても、「主頂点」卓立が起きる場合に末音節だけが上昇下降調になっている発話が観察されるし、また、短い A 型文節 HL に相当する「ソノ」の実現形には、[ソノ]]のような実現形が頻出する。B 型の L!H の配分が、他の甌島諸方言と同様に、末音節の長短に応じて 1~2 音節になるのに対し、A 型!HL の配分は、音節長に関わらず 1 音節になる場合が多い。全体として、甌島型の重起伏音調から、文節末の「低」の長さによる対立に移行していく過程で、A 型の「低」が短くなる傾向がある、といえるかもしれない。

連文節構造では、A 型文節の後でも B 型文節の後でも上昇調の境界声調が観察されるが、(43)c は特に鹿児島方言の「しみじみ調」と似たイントネーションの存在が疑われる例である。上昇の後の後続の文節頭の「高」は、文節単独の場合より高く、また、長音節の場合に下降調が観察される例もある。

- (43) a. ゲ]タ[フン]]ダイ]] 「下駄を(A)履いたり(A)」
 b. ジョイ[フン]]デ 「草履を(B)履いて(A)」

- c. クソー[シ]カブル[メニ[オー]]テ 「糞を(B)しかぶる(A)目に(B)遭って(B)」
 d. ガッ[コー]ノ[ト]コイ[ノ] 「学校の⁵(A)ところの(A)」

しかし、B型では、主頂点 LH が実現している場合にはむしろ下降調の境界声調が現われると解釈できる発話もある。(44)b は、短い B 型文節シコの唯一の有声音節の後で下降調が現われている。

- (44) a. タ[ノ]シ[ミ]ヤルワケ 「楽しみ(B)である(B)わけ(B)」
 b. カー][ナ]レンシ[コ]ヤッ]テモ 「買うことも(A)できない(B)ほど(B)でも(B)」

一方、A型文節に後続する位置では、上昇調の境界声調が現われていない発話も多い。

- (45) [ジュー]ゴロ[ク]ニナッテ 「十五六に(A)なって(B)」

3.4. 考察

(26),(27)にまとめた中甕方言の特徴を、他の3方言と比較する。

(26)と(27)aに関しては、すべての方言に共有される特徴といてよい。

3.4.1. 「主頂点」の弁別=(27b)

すべての方言でA型でHL、B型でLHであり、主頂点が卓立しない変異形(!H)をもつ、という点が共通である。A型では、副頂点があり主頂点が卓立する場合には先行してMが現れ、中甕、里では副頂点が主頂点の直前の長音節の場合はこの音節が下降調となるが、下甕ではこの下降調は現れず、鹿島で確認されるのも「アクセントの弱化」による冒頭の隆起がある語例のみである。

A型の!HLはすべての方言で確認できるが、B型のL!Hは里と鹿島で特に目立ち、文節末の2モーラの「低」が弁別特徴になっている印象がある。これに対するA型は文節末1モーラの「低」をもつが、特に鹿島では短音節でも下降調になるなど、さらに「低」が短くなり、下降幅も小さい。このような下降の短縮のない里では、主頂点が卓立しない場合の型の弁別は、文節末2モーラの下降曲線による微妙なものとなる。

3.4.2. 「副頂点」の声調配列=(27c)

中甕と下甕が上昇調MH、里が高平調(H)H、鹿島はMHであるがHは高平調である。下甕はこのMHの上昇が文節頭音節のみで実現する。中甕は、文節頭音節が短い場合に「主頂点」である(M)HL、LHの前の音節数に応じてこの「副頂点」が1音節または2音節で実現し、文節頭音節が長い場合は1音節で実現する。里は、文節頭音節が短い場合には中甕

⁵ 「学校」のアクセント型は甕島でも方言によるとみられる揺れがある。里でB型、鹿島でA型。中甕では両形が出現している。

と同様に H か HH かの配分が決まるが、長音節の場合には必ずしも 1 音節とはいえず、鹿島では H の持続が B 型の場合を中心として伸びる場合が多い。

文節頭 2 モーラへの配分は、本来 MH のような声調連続であったからと考えるのが自然である。里と鹿島では MH が平進の H になることによってこの配分が崩れつつあり、下甌では MH のままでその上昇の配分が短音節内部に短縮した、と考えるべきであろう。

なお、鹿島方言での「主頂点」の非実現と、MH の文節冒頭の卓立の喪失は、上村(1941)で主頂点と副頂点が逆転するとして記述されている江石方言を連想させる。上野(1984:p40)は、江石方言を A 型、B 型の H の直前に 1 モーラの L をおき、その直前に H のある体系と分析する可能性を提示した上で、6 音節イロ[エ]ンピ[ツ]の語例を根拠としてこの分析を否定しているが、イロエンピツは長音節内に「副頂点」がある場合に当たっていることを考慮すると⁶、(46)のような語声調として分析することも可能であると思われる。鹿島方言で A 型・B 型ともに副頂点 MH の卓立を失いかつ主頂点の卓立がなくなった場合に想定される(47)との違いは、「副頂点」上昇部分の声調曲線(L+H/MH+)の違いだけである。

(46) A 型 L+HM!HL B 型 L+HL!H (江石方言)

(47) A 型 MH+M!HL B 型 MH+L!H

これらの「副頂点」の声調配列は、甌島諸方言が共通に経たアクセント変化に由来する、という解釈が成り立つ。

3.4.3. 文節末の境界声調={27}d, e

A 型文節末に上昇の境界声調“{”をもつのは、中甌、里、鹿島の 3 方言である。ただし、里と鹿島のデータでは、A 型文節末にこの境界声調が現われない発話例も多い。この特徴が甌島方言にしか見当たらないことを考慮すると、甌島北部方言のみの変化によって現われたと考えるべきであろうと思われる。あるいは、何らかのイントネーションによるもの、という可能性も否定できない。

B 型文節末に上昇調の境界声調が現われるのは、里、鹿島の 2 方言である。いずれも、B 型「主頂点」の LH が抑制される方言であり、鹿島方言の場合、LH が実現する場合には逆に下降の境界声調が現われている例がある。このことから、この上昇調境界声調は、LH の文節末の上昇が遅延して後続文節冒頭で実現するようになった結果として分析できるように思われる。ただし、LH が実現する場合に鹿島方言で現われている下降の境界声調“}”

⁶ 上野(1984:p40)には、「ン」の所為ではないことは、主流方言の 5 モーラ名詞+助詞の例との対応から予想される」とあるが、この意味するところはよくわからない。なお、上村(1941)には江石方言の 5 モーラ名詞+助詞の例はない。主流方言で A 型主頂点がンの前に移動することは 1 章で述べたとおりである。

や、里、下甌で散見する、「副頂点」をもたない語が B 型文節に後続する場合のピッチ下降は、甌島方言にも本来は B 型文節末に下降の境界声調があった可能性を示唆している。B 型文節末の LH~LH}~L!H{ の間の系統関係は、鹿児島県本土側の H}や LH{、L{をはじめ、他の二型アクセントの B 型語声調の成り立ちとの関係で分析すべき問題であるかもしれない。

3.4.4. 再構形

B 型文節末の境界声調の問題を棚上げにすれば、甌島の重起伏方言で文節頭の MH が加わる前に想定される語声調は、(48)のようなものになる。あるいは、A 型 *MHL<*LHL を仮定すると(49)になる。文節頭の MH を欠くとして江石方言に仮定した(46)は、(49)から直接導くこともできる。

(48) A 型 *M+HL~*M+!HL B 型 *M+LH

(49) A 型 *M+LHL~*M+!HL B 型 *M+LH

つまり、鹿児島方言あるいは平良方言からの変化を仮定するとしても、(27)a の重起伏と (27)b-c の B 型文節末の LH 化が連動しているのではない限り、間に(48)または(49)のような中間の段階を想定しなければならない、ということである。児玉(2010)で枕崎方言に仮定した語声調を本稿の表記に改めた(50)や加世田市津貫方言の(51)は、(49)によく似ている。

(50) A 型 H>LHL~H>LH} B 型 H>M{ (H>L, H>M は多音節にわたる下降)

(51) A 型 L+MHL B 型 L+MH

これは、これらの薩摩半島南西部の諸方言と甌島の諸方言が(49)あるいはそれに近い共通の祖形から派生した可能性があることを示している。ただし、中甌島の重起伏のないとされる平良方言の声調配列が、同じ祖形から派生したことが示せるかどうか重要な条件になっていると考える。

(3)にまとめた上村(1941)による平良方言の記述は、長音節に終わる A 型の語例を欠くなど音節構造ごとの声調配列や境界声調の記述が不完全ではあるが、「副頂点」を欠くこと (= (27)a) B 型の語末が長音節を含めて高平調であること (= (27)b,c) といった、鹿児島方言と同様の特徴をもっていることがわかる。このことから、B 型文節末音節の高平調 H}の上昇が遅れて上昇調となる、という同種の変化を仮定すれば、甌島では平良方言に近い形から、薩摩半島南部では鹿児島方言に近い形から、それぞれ独自に(49)や(51)→(50)の変化が起きた、という解釈もじゅうぶんに成り立つと思われる。これを否定するためには、平良方言の語声調が(48)あるいは(49)からの変化によって生じた可能性があることを示さなければならない。

しかし、一方で、鹿児島県本土と周辺の各種の二型アクセントの祖形が、現在の鹿児島方言に近い形であったと考える根拠は、必ずしもない。鹿児島方言の際立った特徴は、A型 HL、B型 H₁のHが共に、可能であれば音節の長さに関わらず高平調で持続して実現することであるが、この特徴は、(A型の記述が不十分である平良方言を除けば、)分布が広いとはいえ、鹿児島方言以外には見出されない。B型に限っても、甑島の平良方言以外で鹿児島県立図書館の方言ライブラリで確認できたのは、屋久島の安房里方言に限られる。屋久島の場合、B型文節末の下降の境界声調が、後続文節のない位置を含め文節末音節に実現したと解釈できそうな下降調が特徴となっている方言が多い。

この、境界声調を考慮すると、甑島や薩摩半島南部のB型のLHの説明として、先に述べた「高平調の上昇の遅れ」のほかに、もうひとつ別の可能性が見えてくる。下降の境界声調が文節末の下降調として実現しうるのであれば、文節末の上昇調のほうは、上昇の境界声調の「上昇の早め」としても説明できるのである。B型文節末に現われる境界声調は、鹿児島県本土側では下降が多く、また、金田一(1954)が「アクセントの滝」と呼ぶB型文節直後の下降は九州西南部の二型アクセントにしばしば報告されているが、上昇の境界声調も、枕崎方言のM₁や甑島のL!H₁のほかに、種子島や、屋久島の短いB型文節の後でも観察される。二型アクセントのいずれかの段階の祖形で、B型文節末に*L₁のような声調配列があった可能性は否定できない。

鹿児島方言の「高平調卓立」は、これを欠きかつ「モーラ方言」として文節末長音節ではHLが必ず下降調で実現する北薩方言と比較すると、特にA型の場合は「早い上昇」(例：ト[ロン]ボーン～トロン[ボーン])で特徴付けられる。もしもこれがイノベーションであるとすれば、B型でも平行的な上昇の早め(*LH > [H])があったと考えることができるはずである。つまり、先に述べた「上昇の遅れ」とは方向を逆にとる考え方である。鹿児島県本土の周辺部の二型アクセントには、Hをピッチの上昇曲線や下降曲線の端点として、つまり、必ずしも長さをもたないものとして分析したほうがよいものが地域を問わず広く分布している。「語声調」体系としては、このような曲線声調の組み合わせが無標であり、鹿児島方言のような一定の長さのHの持続は、甑島でもそうであるように、何らかの変化の結果として、散発的に現われているようにも思われる。このような考え方にたてば、(48)あるいは(49)は、鹿児島県本土の広い地域で生じた「シラビーム方言」化を経る前に分岐した保守的な特徴を残す声調形ということになるだろう。

以上、甑島方言のアクセント系統の問題が、九州西南部での二型アクセント、さらには文節を単位とする語声調の成り立ちを考える上で着目すべきさまざまな特徴の存在を示唆

することを指摘して、考察を終える。

参考文献

- 上野善道(1984)「新潟県村上方言のアクセント」『金田一春彦博士古稀記念論文集』2(言語学篇) 東京：明治書院. 347-390(1-44).
- 上村孝二(1941)「甌島方言のアクセント」『音声学協会会報』65/66. 12-15.
- 上村孝二(1965)「上甌島瀬上方言の研究」『鹿児島大学法文学部紀要文学科論集』1. (『九州方言考⑤』ゆまに書房 (77)-(106) 所収.
- 金田一春彦(1954)「対馬 附壱岐のアクセントの地位—九州諸方言のアクセントの対立はどうしてできたか」九学会連合対馬共同調査委員会『対馬の自然と文化』古今書院.
- 児玉望(2005)「鹿児島タイプ二型アクセントの音調句」『熊本大学言語学論集 4』281-307.
- 児玉望(2008)「曲線音調と日本語韻律構造」『熊本大学言語学論集 7』1-40.
- 児玉望(2010)「方言音声コーパスの韻律構造表示～鹿児島県立図書館方言採録テープの分析～」『熊本大学言語学論集 9』1-28.
- Haraguchi, S. (1977) *The tone pattern of Japanese: an autosegmental theory of tonology*. Kaitakusha.